戦場に紅茶

E-mo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
戦場に紅茶

【Ｎコード】
Ｎ９０８３Ｈ

【作者名】
Ｅ－ｍｏ

【あらすじ】
ブラネ女王率いるアレクサンドリア軍は全世界を今制圧しようとしていた。だが、それは泡沫へと帰して…。全てに取り残されたアレクサンドリア兵達は、果たして―。

初めて剣を握った。
その時倒したのは、木と藁で出来た人形だった。
それだけで偉く喜んだものだった。
それだけでたくさん褒めて貰えた。
でもそのうち、それだけでは滅法足りなくなる。
誰にも見てもらえなくなる。
もっと、もっと強い相手を倒さなくちゃ。
そう思って家を飛び出し、私はウルフと戦った。
剣を持つ両手は震え、今にも足は逃げ出したいと戦慄いている。
私は思わず大泣きで逃げ出して家に帰った。
町の門をくぐるとき、兵士さんが私を助けて狼を倒してくれた。
その後、兵士さんは私を家まで送ってくれた。
私は泣きじゃくりながら母の温もりに縋ろうとした。
たすけてたすけておかあさん。こわいこわいおおかみがいるの。
そうしたら。
ばちん、と音がして、頬が熱くなっていた。
一瞬目の前が真っ暗で、どうしていいのかわからなかった。
私はもっと泣いた。
また叩かれて、更に涙が溢れた。
「どうして貴方はそんななの。どうしてそんなに弱虫なの。
　母さんはそんなこと無かったのに。」
強くお成りなさいと叫ばれた。
私はただただがむしゃらにわんわん泣いた。

♪

汚い。リンドブルム商業区を歩いてまず私が思ったのはそれだった。
なんて薄汚い町なのだろう。
酷く無骨で、芸術性の欠片もない。
私達が綺麗に破壊を施した建造物はともかく、何より鉄の臭いが強すぎる。
剥き出しになった鉄は彼方此方で歯車となり、パイプとなり、家の支柱にまで使われている。
一体どういうつもりなのだろう。
確かに鉄は強度では一番を誇る。
召喚獣や黒魔道士達の魔法攻撃を直接受けてもこれだけ残っているのは、そのおかげなのかもしれない。
先に同じように攻めたブルメシアやクレイラは無残な有様だった。
だがしかし、本来なら鉄というのは武具や防具、そして倒した相手の流す血の中に含まれている物だろう。
それらとはほぼ無縁のはずの国民の生活の中心から何故こんなにも大量に現れるのか。
つまり、兵士達に守る力がないのではないだろうか？
その通り、何故かリンドブルムの兵士達は皆やわい布に小さなハンマーという、どう考えても戦う気のない武装をしていた。
どうやら完全に武力は飛空挺団任せのようだ。
私は心底不愉快極まりなかった。
こんなおかしな国が、どうして霧の大陸一であると言えよう？
これからは神聖な「アレクサンドリア帝国」として一つになるといい。
そうして私達の「美しい」文明や技術で町を彩るがいい。
いや、そうでなければならない。
豊かな思想や生活は、そういった基礎から生まれるものなのだ。
このままでは何れ腐っていってしまうだろう。
私達が救ってやるのだ。

実用性に富む乗り物の技術と、アレクサンドリアの持つ「美しさ」。
これが一つになれば本当の意味で豊かな国に出来る。
哀れなリンドブルム国民に知らしめてやろう。
私達が教えてあげよう。
本当に上質で良き物を。
私はそう決心しながら、泣き喚く元リンドブルムの臣民どもを見渡し、奴らが反抗しないように強く見張っていた。
「はぁ、疲れたッス、さすがに商業区までこの有様だと大変ッスね」
「おうよ、だから俺らは暫くこっちを手伝えってボスに言われたワケだ。」
「…今日の晩飯何ずらかね…」
「また沈黙のスープじゃねぇの」
「またずらか！？もう何日何食スープずら！？」
「仕方ないッスよ、こんなッスから」
「そうそう、こんなだからな」
「そんなこんなで納得行く訳ないずら～～！！こう見えてもおいらは美食家で有名なんだずら！！」
「わがまま言われても困るッス」
「おいしいコーヒーが飲みたいずら～～！！」
「働いてからな！」
「そんなところでぐずぐずしてると置いてくッスよ」
「待つずら～～！！言ってるそばから置いてくなずら～～！！」
あれは確か、ここいらで有名な盗賊団だったはずだ。
ただし義賊らしく、国民からの評判は上々で、今も町の復興作業を手伝っている。
通常の盗賊やゴロつきなら瓦礫から使用できそうな物資を掻っ攫っていくところだろう。
素直に感心しそうになる心を慌てて振り払った。いけないいけない。
敵に心奪われ、その剣が鈍ったらどうする。
私は休憩用のテントに入り、少し体を休めることにした。

そこに、慌てて走ってくる一人の下級兵が現れた。
確か彼女の名前はエルミナ。私の直属の部下の一人だ。
一風変わった少女だと記憶している。
「す、すみません隊長！」
私はため息をつきながら言った。
「どうしたんです一体？」
「包帯と消毒液を頂けませんか？薬が足りなくて雑貨屋も全然販売してくれないんです」
「敵国の兵士になぞ売る物はないに決まってます。どこか怪我でもしたんです？」
訝しげに言うと、彼女は大きく反応した。
「い、いえ、別に！」
「…なら、何故？」
「い、い、いえ本当に！必要なんですっ！はいっ」
あからさまに怪しい動揺の仕方だ。
「お願いしますっ」
私はひとにらみすると、テントの奥の小さな薬箱から簡易の包帯と薬草、ポーションを取り出し手渡した。
「あ、ありがとうございます！」
勢いよくテントを飛び出していく彼女の後姿を見送りながら、気が滅入りそうになる火薬や鉄さびの臭いをごまかすため、
静かにカップに茶を注いだ。
広いリンドブルムの城下町を歩きまわり、疲労を蓄えすぎた。
心にゆとりを忘れてしまったら、全てなくなってしまう。
芳しい芳醇な香りが辺りをたっぷりと潤わせる。やはり戦場には紅茶だ。
そうしてしばらくした後、部下達が順番に帰ってきた。
休憩と食事を取るために。
しかし未だ反抗の色を消さないリンドブルムの国民達は、目を放した隙に何をしでかすか判ったものではない。

一時たりとも目を離さぬよう、ローテーションで交代交代見張りをしている。
そこに、あのテルミナが戻ってきた。相変わらず挙動不審にきょろきょろと辺りを見回している。
配給のパンを数個取ると、テルミナは腰を落ち着けることなく簡易テントから外へと出て行った。
今日は妙に彼女の動きが目に付く。
今までは放置しておいたが、さすがに怪しく思えてきて、その後をこっそり、いや堂々と付いていった。
馬鹿なテルミナは気づくことも無く、路地裏に入り、夜の寒さに震える幼い少女の前までやってきた。
「はい、これだけしかないけれど食べて」
「……おねえちゃん、ありがと……」
あろうことか、テルミナは家をなくし、建物の影で生活するリンドブルム国民達に食料を分け与えている。
その少女だけではない。老人や女性、怪我をした青年にまでも分け隔てなく配り続ける。
なんて戯けた女なのだ。情けない。敵に餌を与えるなんて愚の骨頂だ。
何のために私たちが、いやブラネ様が徹底的に打ちのめすようなことをしたと思うのか。
やはり私の勘は間違いではなかったようだ。
しかもおかしなことに、随分懐かれているらしい。あの兵士然としたアレクサンドリア随一を誇る軽めの素材で作られた鎧を堂々とひけらかす
あのテルミナに誰一人食って掛かろうとはしない。
「テルミナ」
「これは一体どういうことです？」
「は、あ、たっ、隊長！？」
「ただでさえ少ない食料を餌とするなんて…軍人の恥ではありませ

んか？」
「そ、そんな、餌だなんて…」
テルミナは俯く。
その心の機敏に敏感に反応したのか、先ほどの少女が立ち上がってこちらを攻め立ててきた、
「おねえちゃんはわるくない！」
「そうじゃ、そうじゃ貴様らのような能無しの馬鹿とは違うんじゃ」
低俗な悪口だ。私は吐いて捨てる。
「貴方達。リンドブルムは既にアレクサンドリアの支配下です。それだというのに、いいご身分ですね」
「…いつかアレクサンドリアは…ブラネは必ず報いを受けるだろうよ…」
「口を慎みなさい。ブラネ様を悪くいうことは許しませんよ」
体を動かせないのだろう、青年は頭を必死に動かし、鋭い視線を向けた。
「ホント、いいご身分だね」
「や、やめてください皆さん！私が悪かったです、すみません。気持ちは受け取りました、ありがとうございます。
でも隊長、彼らだって私達と同じ人間です。私達と同じように自国を愛し、誇りに思っているんです。
それを勝手に奪われて、たくさんのものが無くなって、辛い思いをなされているんです。
なのにそんな…見下すのは余りにも……酷すぎます」
いつも挙動不審で怯えていたような、気の弱いテルミナの姿はそこにはなかった。
凛と構え、正を貫く一人の人間がそこにいた。私は居た堪れなくなって踵を返し、喚く。
「弱肉強食。世界の摂理で常識です。それに倣えない者は異端として、弱者として切り捨てられる運命にあります。それをよく覚えていらっしゃい。」

私の背中に感覚器官は無いから正確にはわからない。けれど悪態を付く声と、必死に宥める声が聞こえた、気がした。
そのまま暗い夜道をランタン片手に歩いて戻った。
リンドブルムは城壁に囲まれた町なので風が遮られ比較的温かい。
だからといって完全に密封状態になるわけでもなく、上手く考えられて出来ている。
リンドブルム特有の機械技術の賜物なのだろうか。
私は時折瓦礫に躓きながらもランタンを差し出し、すたすたと歩いていった。
すると、真っ暗闇の中に強い黄色い光が見えた。
どうやら瓦礫の下に埋まっているらしい。
しかし襲撃が終わり、大分経っている。通常の人間なら命を落としていてもいい頃だ。
今まで生きていたなら奇跡だろうし、きっと放っておけば死んでしまうだろう。
「…誰かいるんですか？」
私はランタンを掲げて声を掛けてみた。
「ひ、っひ…」
どこかで聞いたことのあるような、臆病に震えた呻き声が返ってくる。
私は疑問に思い、その瓦礫を覗いてみる。
…そこには。
一対の金色の光が、闇の中から現れているのが見えた。
これは、黒魔道士兵？
戦争のために造られた彼らは強力な黒魔術を使い、容赦なく人々を襲っていく。
その姿は非常に不気味で、仲間である私達ですら恐ろしい。
まさか、まだ使用可能な黒魔道士がここに埋まっているのだろうか。
私は瓦礫に手を伸ばした。そのときだった。
強烈な閃光が迸り、私は一瞬で視界を奪われた。同時に雷の落ちる

音と、落石したかのような、石くずの流れる音が聞こえた。
「、う、わ。」
それは、確かに声だった。私は目を瞬かせると、必死にその輪郭をなぞった。
とんがり帽子に、黒いローブ。そして宙に浮く二つの金色の光。間違いない。
「…どうしてそんなところにいたのです。まだ貴方は戦えますね？」
「た、たかう？」
蚊の鳴くような小さな声が返ってきた。ボーイソプラノのような声だった。
距離と位置からして、どう考えてもこの黒魔道士兵から発せられている。
待てよ。黒魔道士兵は心を持たぬ人型の戦争用兵器である。
言語ツールは完全に必要ない。そんなものは用意されていなかったはずだ。
なのに。こいつは言葉を反復した。何故だ？
「…貴方は…喋れるのですか？！」
「しゃべ…れる？」
どうやらこいつは酷く怯えている。
どうしたことかと思っていると、遠くから光が駆けて来た。
「…隊長！？」
この声はあの愚鈍なテルミナだ。石くずを踏み鳴らし、ばたばたと駆けて来る。
「こんなところで何を……これは…黒魔道士？」
「う、うわ、うわあああああああああっ！！！」
「ま、待ちなさいっ！！」
しかしその命令は届かず。その黒魔道士は次は両手から炎を出すと、テルミナの来た方向とは逆に逃げ出した。
「あっ…隊長、今のは、一体…」
「私にも判りませんよ」

「私は彼らがキル、と掛け声を出しているところしか見たことありません。何故…」
「…それより早く戻りますよ。そろそろ交代の時間ですし」
「あ、はい…」
先ほど真っ向から意見が対立したばかりだ。彼女も気まずいのだろう。
無言で私の後を付いて来た。
だがしかし、しばらく町を歩いていると、唐突に彼女は口を開いた。
「…ひょっとして黒魔道士達は心があるんでしょうか。それでもなお、無いフリして私達と共に、
いえ、私達の代わりに前線に進んでくれているとしたら…」
「そんなことはありません。あの冷徹な仕事ぶりを見たでしょう？彼らはただの道具なのです」
「どう、ぐ？」
テルミナは動かす足を緩めた。
「そうでしょう？あれのどこが人間なんです？片腕が無くなっても文句一つ言わない。
同族が倒れても涙一つ流さない。そんな心無い人間がどこにいますか」
「で、でも今！！さっきの、あれは！？」
私はなお食いついてくるテルミナを一掃した。
「考えすぎです。妄想も大概になさい」
「妄想だなんて！！可能性があるんです！それを膨らませて何がいけないんですか！？」
「合理的な判断をするのに不要です」
そう言った瞬間何故だろう、彼女は哀れむような視線を投げかけてきた。
おかしい。哀れなのはテルミナの方のはずなのに。
しかし、少しだけはっきりしたことがある。私は彼女が滅法苦手だ。
私は早足で進むと、テントを潜った。

♪

一生懸命に剣を振るった。
盾を上手く出さないとまた殴られた。
何十キロもする鎧を着て城下町中全部を何十周も走らされた。
お洒落もおままごとも許されなかった。
ただひたすらに、強くなることだけを夢見て。
そうしたら、褒められた。
嬉しかった。だからもっと頑張った。
怒ると鬼みたいなお母さんが天使のように褒めてくれる。
それだけが原動力だった。
ついに私はウルフを倒せるようになった。
それだけじゃない。普通の男性兵士にも勝てるようになった。
将軍レベル以外の誰にも負けることは無くなった。
声高らかに勝利の宣言が私に下される。
そうして私は叫んだ。
私は、生涯女王様と、この国のために剣を使うことを、誓約致します。
きらきら輝く勲章は、胸の中に。
母は目一杯喜んでくれた。
美しい装飾をたくさん拵えたドレスや紅茶までも用意をしてくれた。
それでよかった。よかったのだ。

♪

「ブラネ女王が戦死された」
その訃報が私の耳に入ったのは、その翌日だった。
私は、いや私だけではないだろう。同じテントにいた同胞達は足場を失ったかのようにへなへなと力なくその場に座り込んだ。
目の前が真っ白になる。そうして悔しさと悲しさが込み上げて来る。
アレクサンドリアには既に遺体が行方知れずであったガーネット様と共に到着しているらしい。
何故その場に私も居合わせなかったのだろう。
ブラネ様はたった一人を相手取ると油断し、精鋭兵をほんの少数で組み立てた戦艦軍隊を連れ外側の大陸へ旅立っていった。
その油断がきっと、命取りだったのだ。
何も出来なかった自分に敗北と後悔の味がじわりじわりと広がってくる。
酷く辛かった。栄光は、途絶えた。
きっと数日中に引き上げ命令が下るだろう。
私は日課となっていた見回りを続けた。負けたとはいえ未だ剣を手放す気にはならない。
住民達の牽制のため、武器と防具はこのところ長い間手放したためしがない。
でもこれからは違う。もう立場は同じ、それどころか逆転する可能性だってある。
こちらには中心となる指導者はいない。あの臆病な娘が兵を仕切り、国を守るために剣を取るはずがない。
心の拠り所を失った。
だがしかし、このリンドブルムにはまだ大公が存在する。士気も十分だ。
この情報が漏れればいつ立場が逆転するか判らない。苦汁の日々を強いて来た私達への不満は十分たまっていることだろう。
情報漏洩対策を一刻も早く打たないと―
馬鹿だ。そんなことをしたところで時間稼ぎにしかならないではな

いか。
何れすぐに知られることだ。
私は気持ちを晴らすためにテントに入り、お気に入りの紅茶を入れるため、ポットを温めた。
そして茶の葉を貯めた缶を開けた。ところが。
いつもの気持ちを落ち着かせるような強い茶の香りだけが漂い、肝心の葉自体が空っぽだった。
「はぁ、誰です。きちんと管理しておかないのは……」
そう呟いて自分自身の管理不足を呪った。
そうだ。最後に飲んだのは私だ。昨日寝る前に体を温める目的で煎れたのだった。
私は鍋に点けた火を消し、後ろで談笑している部下に尋ねる。
「はーぁ、やっとこんな暗い戦場とおさらばできるのかぁー」
「えへへ、彼氏から手紙が届いたの！会いたいですって！」
「あーあ早く帰りたいなぁ。元気してるかなぁ皆。あたしも警備兵になればよかったかなー。でもやっぱ前線の方が稼ぎがいいからねぇ」
「あーぁ早く会いたいなぁ。しばらく会わないうちにちょっぴりカッコよくなってたりして！なんかプレゼントしてくれたりして！うふふ〜〜！！」
「…貴方達。軍人の端くれとして恥ずかしくないのですか。そんな現を抜かして」
「そんなって…隊長、戦う乙女の唯一の楽しみですよぉ？」
「隊長こそ、彼氏いないんですか？」
馬鹿みたいだ。私は侮蔑の視線を向けるとため息をついた。
「…もういいじゃないですか。ブラネ様はもういなくなってしまったんです」
「…ブラネ様は、まだご健在で……」
「…それこそ戯言じゃないですか。既に皆確認しているんですよ、隊長殿？」

「……そうですね、謝りましょう…。それより紅茶は余っていませんか？」
「紅茶、ですか。もう物資の配給も終わってしまいましたからね、無いと思いますよ」
「商業区の端で薬やら売ってる女性がいましたよ」
「判りました。そこで入手してきます」
私は仕方なく外へと歩き出した。後ろで二人がひそひそと何か囁いているのが聞こえた気がしたが、気にしない。
この場所は既に敵地なのだ。本来なら一人で歩きたくも無い。
敗北。その色だけで随分と世界が変わって見える。
既に事切れ、道端で倒れていた黒魔道士兵を迫害しようとするリンドブルムの民達がいたが、私はどうにも気落ちしてしまい、止める気力すら沸かなかった。
重たい鎧を引きずって、私は商業区の中心地へと足を運んだ。
ふらふらと気力なく歩いていたのが拙かったのだろう。
気が付けば老婆が目の前で倒れていた。どうやら私と酷く衝突したらしい。
冷たい視線が胸を抉る。私は慌てて無言で老婆を助け起こそうと手を伸ばした。
しかし彼女の様子がおかしく、何かを探るように右手を伸ばしてくる。
「ど、どうしたのです！？どこかぶつけたのですか！？」
「…あたた、すまんねぇ、私、目をやられちゃってねぇ」
私は宙をまさぐる右腕をつかむと、ゆっくりと労わる様に立ち上がらせた。
「目を…？」
「ああ、あの変なとんがり帽子にねぇ…。おかげでなんも見えやしない…。もうすぐ生まれる孫の顔も拝めないんだよ……」
「お孫、さん…ですか」
「どんなに可愛いだろうねぇ。老後の唯一の楽しみだったのに…あ

たしゃこれからどうやって生きていこうかねぇ……」
「……」
そうだ。これは戦争なのだ。夢や希望が潰えて当たり前なのだ。
…けれど。
この老婆にそんな覚悟があっただろうか？身を守り戦う術を持っていただろうか？
それをこんな風に一方的に、大嵐のようにただ破壊と殺戮のみを行うなんて。
彼女がアレクサンドリアに攻め入り全てを奪い去ろうと考えただろうか？
そんなこと、一度も思いもしなかったに決まっている。
だって剣すら握ったことの無い手だ。
それなのに。なのに。
一般人をこんなに巻き込んで。
これは、戦争じゃ、ない。
これは、私達の、やってきたことは、ただの虐殺だ。
ああ。
なんて愚かなのだろう。今更気が付くなんて。ブラネ様、貴方は間違っていたのだ。
「おい何するつもりだ！！婆さんから離れろ！！！」
「婆さん、逃げろ！そいつアレクサンドリア兵だぞ！？」
「…アレク、サンドリ……なんじゃって…！？」
「向こうへ行け！『負け犬』め！！」
「…ブラネ様がお亡くなりになったこと、既に周知なのですか？」
「うるさい！とっととアレクサンドリアに帰れよ！！」
憂いは本当になった。いつの間に漏れていたのだろうか。
惨めだ。情けない。
ほんの短い虚勢すら張らせてもらえなかった。
愚かだ。
私はすぐに踵を返してテントに向かい、歩き出した。

「…待て、アレクサンドリアの女兵」
あの老婆だ。私は背を向けたまま、少しだけ振り返る。
「…親切にしてくれてありがとう。」
「わ、私は何も…」
私は酷く狼狽した。
「お前さん随分若いというのに、大変じゃの。
私らは女が戦争に行くという精神は理解が出来んが、女の苦労はわかる。
お前さんがこれからどう決めていくのか判らんが、頑張るんじゃよ」
「…ありがとう、ございます」
私は顔を背けて走り出した。
こんなに優しくていいのだろうか、この人は。
それともあて付けのように愚痴をこぼした詫びなのだろうか。
判らない。それでも私が酷くその言葉に心揺れ動かされたことだけは事実なのだ。
今にも泣きそうになる顔を隠し、私は走った。
「ん？お、おい、そこの瓦礫ちょっと退けてくれ」
「了解ッス」
「お、あ、あったぞ！！これか！？」
「そうそう、それが形見よ！！ありがとう見つけてくれて！！」
「いやいやお礼ならおいらに言うずら。一番頑張ったのはおいらずら」
「シナさんが一番何もしてないッス」
「何を言うずら！皆においし～～いコーヒーを用意してやったずら！！
それも辛口コーヒー通の中でも好評なエベレス・コーヒーずら！！高かったずらよ、これ！！」
「はいはい、シナさんの薀蓄はいつ聞いても最高ッス」
「心がこもってないずら～～！！」

「判ったからお前ら、瓦礫戻すの手伝ってくれ」
町を修復する人たちの声が聞こえる。
もし、アレクサンドリアがこうなったら？
どうしたらいいのだろう。
一生懸命だった。ただ、この剣が国のためになればと。
ひたすらにそれだけを思ってずっと突き進んできたのに。
耐え難い屈辱の言葉にも辛い訓練の日々も負けずに。全て間違いだったのだろうか。
判らない。どうしよう。
「おいアレクサンドリアの姉ちゃん！！そんな格好でふらつくな！！」
「…？」
振り返ると、ボロボロの格好をした少年が駆けてきていた。
「今鉄の需要があがってる。盗られるぞッッ！！」
「心配無用です」
不思議だった。どうして彼は私なんかに声を掛けたのだろうか。
それで気をとられたのだろう、突然目の前で派手な音を立てて少年が転んだ。どうやら本当に慌てて走って来たらしい。
後ろから追いかける声がする。待て、返せ、金払え、と叫ぶ男から、即座に彼が窃盗を犯してきたことを悟る。
普段なら私は彼をすぐにふんじばって捕らえるだろう。
けれど今日はそんな気になれなかった。みずぼらしい衣服に身を包んだ少年は、きっと生活苦に足掻いているのだろう。
彼は建物の影に隠れて店主達をやり過ごす。
気が付いたが彼は片足を怪我しているらしい。体重をかけることが出来ずに居る。
よくもまぁここまで逃げて来れたものだ。
私は携帯用の救急道具を取り出して、簡易の応急処置を施した。
消毒液とガーゼを取り出し、汚れをふき取っていく。
「骨、折れてるじゃない…。いつからです？」

「お前らが攻めてきた時に決まってるだろ！家が壊れて、逃げ出す時に家具にぶつけてね」
「何を盗ったの」
「……っ、パン」
しみるのだろう、しかし幼い彼はそれを口には出さなかった。
「家族は」
彼の顔が急激に曇ったのを見逃さなかった。
「皆家の下敷きだ」
「…そう」
適宜な大きさの木の棒切れを拾い上げ、その足に当てると包帯で巻きつけた。
「もうやだ。やだよ…しにたいよ……」
突然弱音を吐いたその少年に、私は驚きながらも尋ねた。
「…何故貴方は私なんかに忠告をしたの？そのまま逃げればよかったものを」
「今見てきたばっかりなんだよ！！町の皆、行き場のなくなった怒りをあの人形やお前らにぶつけてんだ。俺の好きだったリンドブルムを穢さないでくれよ！！」
「…そう……」
私はまた携帯用の小さな鞄から非常食を取り出し、彼に渡す。
彼は戸惑うようにうろたえたが、それでもそれを受け取らざるをえなかったようだ。
訝しげに睨みながらも、彼は干し肉をそのまま口にした。
「お前、何なんだよ…」
「迷ってる」
「た、隊長！！こんなところで…どうしたんです、その子！！」
「て、テルミナ」
裏路地に突然入り込んできたのはあのテルミナだった。
私にとっては少し気まずい。
「隊長、これじゃ包帯緩いしすぐに取れてしまいます。私にやらせ

てください」
「わかったわ」
テルミナは何故か嬉しそうに微笑んだ。
気まずいのは私だって言うのに。この子は。
確かに彼女は慣れた手付きで、手際が良かった。
私がやるよりはるかに上手いだろう。
それもそのはずだ。隠れて何度も何度もこうやって怪我人の世話をしてきたのだから。
そうして暫くここで腰を下ろして、息をついた隙だった。
「こんなところにガキ連れ込んで何してやがる」
ふと見れば、見上げるほどの屈強そうな大男達が数人、こちらを厭らしそうな目つきで眺めている。
「お前らアレクサンドリア兵じゃねぇか。どうせお嬢様軍隊だ。金目のモンジャラジャラ持ってんだろ？」
「その鎧も、全部寄こせよ。お前達が壊した分返してくれ！！」
「、く」
「い、いやっ、放してください！！」
男は掴み掛ってきた。私は彼の手を引いて後ろに走ろうとしたが、彼は片足を怪我している。
動けるはずが無い。
私は咄嗟に少年を庇い押しやった。そのとたんに男の大きな手が私の上からのしかかり、身動きが取れなくなる。
じゃり、と砂を噛む音が聞こえた。
鈍い転倒音も後からしたので、憶測でしかないがテルミナも一緒に倒れ押さえつけられているのだろう。
「な、なん、なんで……」
「逃げて！！逃げなさい！！」
「私たちは大丈夫！！」
「こいつはどうするよ」
「う、うわ、うわあああっ」

少年は多分、その不自由な足で男に戦いを挑んだのだろう。
まさか、とは思ったが。
私たちを助けるために。そうして、一緒に、死ぬために。

♪

怖かった。
すぐにぶつ母親が怖くて怖くて大嫌いだった。
それを見てみぬふりする父親も大嫌いだった。
怖くて怖くて仕方なかった。
その日は最後の兵士見習いとしての研修だった。
立派な隊長経験のある母親は私を見るために同行していた。
怖かった。
またぶたれる。
失敗したらぶたれる。
私はそんなトラウマを思い出しながらも、それらを全て振り切った、
誇らしい自分の姿を母に見せることが出来た。
母が始めて満足そうに微笑んだ瞬間だった。
私は喜びで胸を完全に満たしていた。
だが、それが怠慢となった。
突然後ろから現れたパイソンの毒の牙が私目掛けて襲ってきた。
終わった、と目を閉じたその瞬間。
目の前に母が飛び出し、私を庇っていた。
「生きて」
母はそういった。生きなさい、と。
大丈夫、貴方なら何でも上手くやれるじゃない。
私は酷い母だったわ。
でも貴方ならきっといい風に出来る。
ごめんなさい。
毒は見る間に母の体を蝕んだ。

「生きて」

「生きて！！！」
私は言った。ありったけの力を振り絞って、叫んだ。
男が慌てて口や体を抑えようとするのを、必死に振りほどこうと暴れてやる。
「生きて！生きて生きて生きて生きて生きて！！！」
「た、隊長…！？」
「お、おい、」
「貴方には私が居る！私は貴方を守りたいの！！」
殴られ、少年がその場に倒れこむ。私は全力をかけて彼に声を掛けた。

「こっちからッス、兄貴！！」
「な、なんだぁ！？」
突然、別の男達の声が聞こえ、路地裏に入り込んできた。
肉が打つ音が聞こえる。
すると急に体に掛かっていた体重が軽くなり、私は自由に動けるようになった。
私はまじまじと彼らを見つめた。一人はバンダナの男、もう一人は継ぎ接ぎだらけの一風変わった男。
二人はそれぞれ別の男を相手にしている。
それともう一人、
「ふー、危なかったずらねー。もう大丈夫ずら！このシナ様が来たからには指一本触れさせないずら！」
変な髭面の小柄の男が偉そうに一人で踏ん反り帰っている。
「だからシナさんは何もしてないッス」

慌てて逃げていく男達の後姿を見送りながら、バンダナの彼が突っ込みを入れた。
「大丈夫だったか？…って、お前はアレクサンドリア兵じゃねぇか、なんでまた…」
「兄貴、人の情に突っ込んじゃダメッスよ」
「あ、貴方達は…」
白い帽子を目深にかぶった怪しい小さな男が胸を張って言った。
「まぁしがないコーヒーマニア一号二号三号ずら。この界隈で悪さするやつらは皆成敗するずら！」
「主に俺らがな」
「は、はぁ…びっくりしました。ありがとうございます！」
「た、助けていただいて…ありがとうございました」
「（お、この反応…きっと惚れちまったんだぜ、俺に）」
「（まーたそんなこと言って…兄貴のその自身はどこからくるッスか）」
「…ま、今度からは気をつけるずらね。未だリンドブルム国民のアレクサンドリアへの反感は全く治まるところを知らないずら」
「え、ええ…そうですね……」
「当たり前ですよ」
継ぎ接ぎの男が少年を支えていた。
「おら、兄ちゃん立てるか？」
「あ、あぁ…」
「君はこれからどうするッスか？なんなら…」
「…私が面倒を見ます。」
「ええ！？」
少年の驚愕の声が聞こえた。
しかし私の決意は既に決まっていた。
だから何を言われようと、変える気はない。
「そうずらか」
「でも大丈夫か？お前さんは…」

「大丈夫です。こうすればいいのでしょう？」
私はその場で鎧を脱ぎ捨てた。
下はほぼ下着に近い姿だったが、気にしない。
「（こ、これはダメッス、兄貴！！）」
「（バ、バカ、鼻に石でも詰めとけ！！）」
「た、隊長っ！！それで町を歩くのはまずいですよっ」
そう言いながらもテルミナも一緒になって鎧を脱ぎ捨てた。
そうして背負っていた鞄から、自分の着替えを一つ、私に手渡してくれた。
「これ着てください。私のも有りますから」
「…ありがとう」
簡易なワンピースだったが、十分だ。
二人でさっと着替えると、私達は盗賊団一向に微笑んだ。
「助けてくださってありがとう御座いました」
「てか、ちょっと待てよ！俺はまだ…」
「嫌とは言わせません。盗みはどんな理由があれ悪いことです。」
「…お暇するずら」
「…そうッスね」
「そ、それじゃ、ま、元気でな！」
そそくさと退場しようとする盗賊団の姿が滑稽で、
私とテルミナは顔を見合わせて、大きな声で笑った。

数ヵ月後。
私達は撤退を予期なくされていたが、未だ商業区から離れなかった。
二人でアレクサンドリアの兵士をやめ、リンドブルムで新たに戦争孤児の子を集め、二人で世話をしていた。
彼らの心の傷は簡単には癒えない。
未だ夜は泣き続ける子供達も居る。
目を失った老人と話をして、たまにきて子供達を一緒に見てもらう連絡をした。

私達だけでは子供の世話をするには心配きわまり無かったし、
何より老婆にも、子供達にも良い影響を与えると思ったからだ。
その思惑は見事成功し、彼女が来るときは決まって皆笑顔になる。
私達はこれからもずっと、この地で生きていく。
いつか戦争することがなくなりますようにと、
霧が溢れ始めた曇天の空に祈りながら。

Rindblm short story – tea in the battlefield – happy end.

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9083h/

戦場に紅茶

2010年10月28日07時10分発行